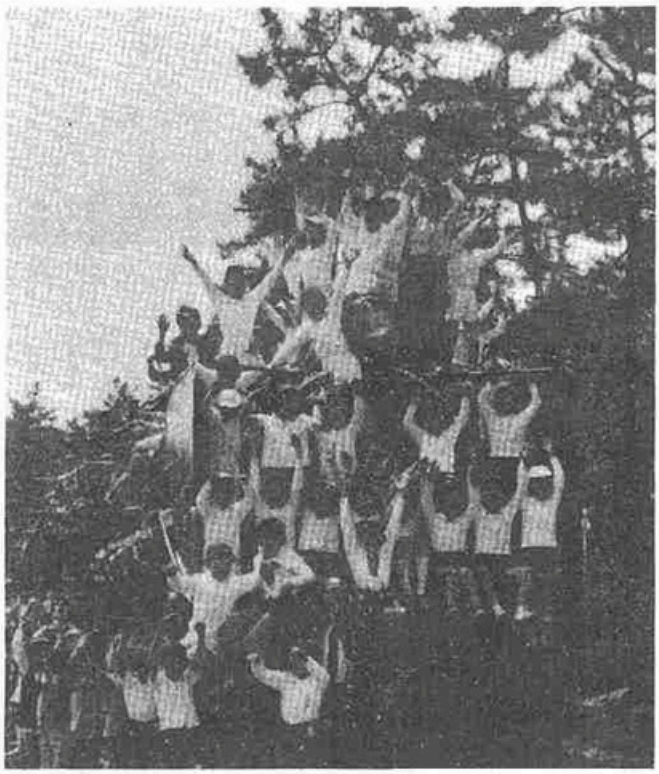
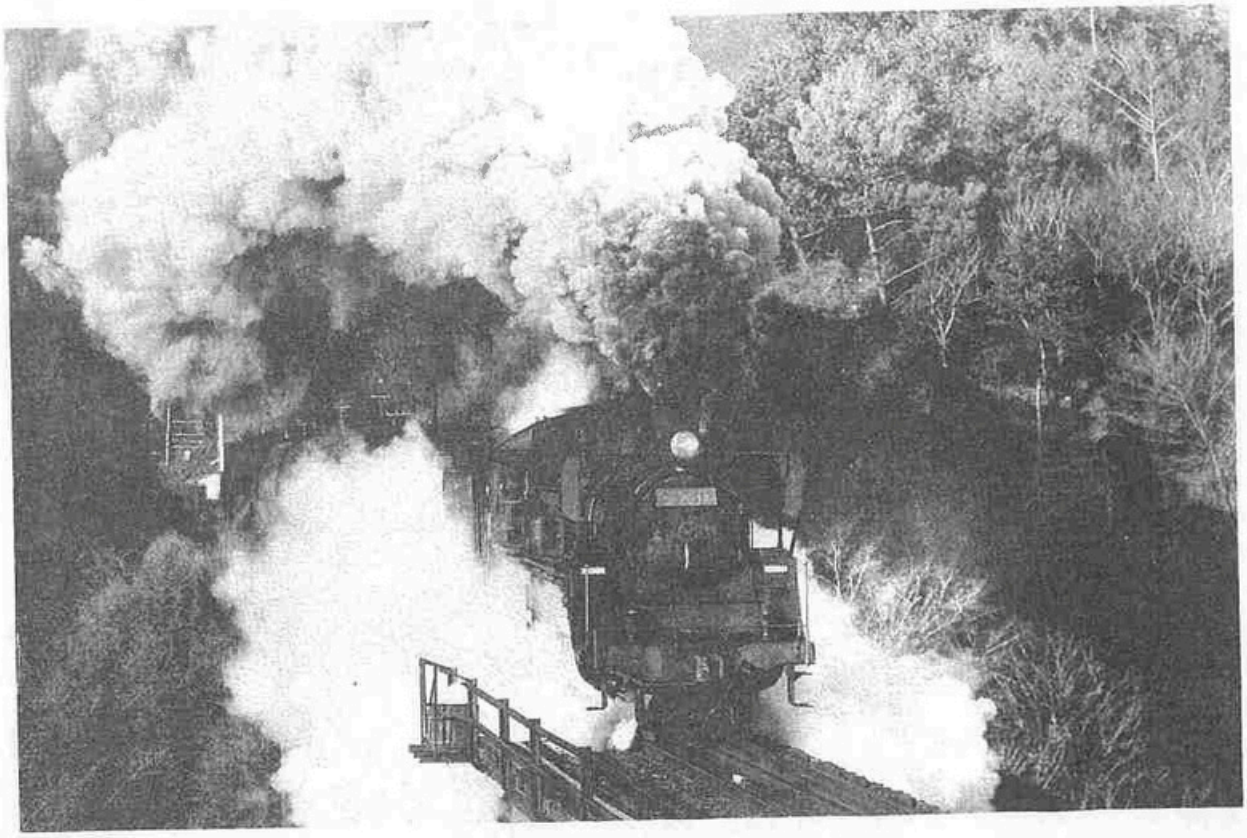
機関車庫落成記念

わたしたちの
C５７３０蒸気機関車



富士市立元吉原小学校



Ｃ５７３０蒸気機関車のれきし

1．いつどこで作られましたか。

今から約40年前、昭和13年２月16日に神戸市の川崎車輌会社で、現在のお金にして約１億円をかけて完成しました。

2．はじめは、どこを走りましたか。

Ｃ５５形流線型機関車の標準型として設計され、スピードの速い力の強い機関車として、石川県の金沢機関区に置かれ、昭和13年から15年まで北陸本線で活躍しました。

3．それ以後はどこを走りましたか。

- 昭和15年～昭和16年　浜松機関区　東海道本線
  （沼津から名古屋間を12両編成の急行列車専問に走りました。）
- 昭和16年～昭和24年　尾久（おく）機関区　東北本線
- 昭和24年～昭和37年　富山機関区　北陸本線
- 昭和37年～昭和38年　金沢機関区　北陸本線
- 昭和38年～昭和44年　名古屋機関区　関西本線、高山線
- 約30年間、各地で客車をひき、昭和44年８月に引退しました。

4．どのくらい走りましたか。

2，139，792．8kmの距離を走りました。.

これは地球を約５２５周まわった距離と、また月まで２．５往復した距離と同じです。

5．なぜ走るのをやめたのですか。

東海道本線をはじめ主な路線を経費が安くて、スピードが速く、しかも、煙を出さない電気機関車が走りはじめ、やがて、電化は全国に広がって行きました。そのうえ、また、電化されない路線にはディーゼル機関車が登場してきたので、蒸気機関車の活躍の場は少なくなりました。それにＣ５７３０機関車は、30年間働きつづけ、だんだん機械の痛みも多くなり、人間の年でいうと、60才のおじいさんになったので、仕事をやめることになりました。

6．元吉原小学校にきたのはいつですか。

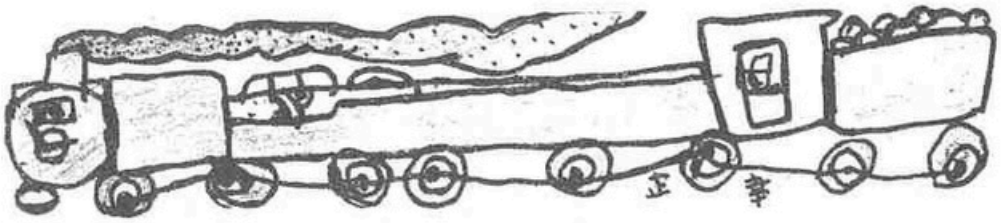
元吉原小の児童や地域の人々の希望を聞いた国鉄が、無償借与してくれましたが、機関車の重量が80ｔ、長さが20ｍもあるので運ぶのが大変でした。機関車は三つに切って運ばれ、元吉原小でもとの形につなぎ合わして設置されました。そして昭和45年４月11日に引き渡し式が行われました。

7．どのように世話をしてきましたか。

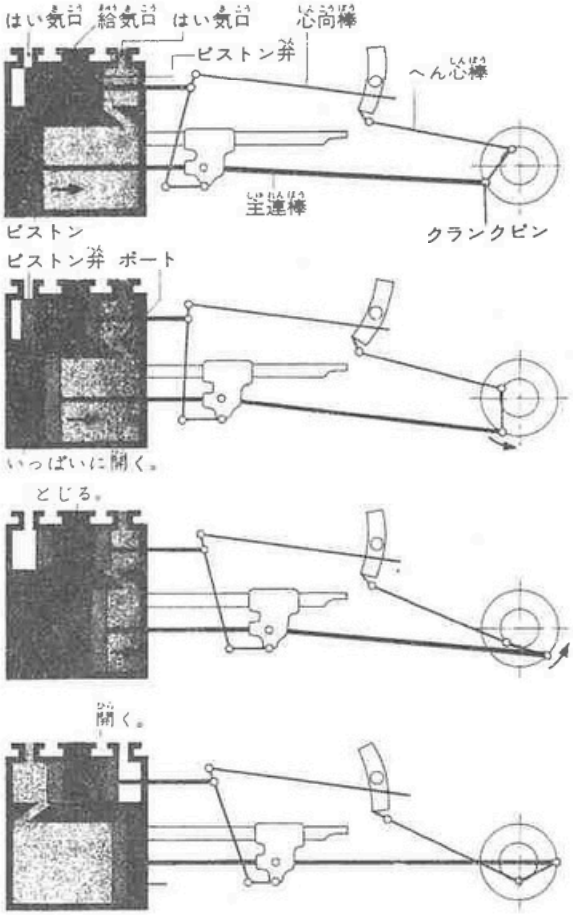
設置されてから潮風でさびるのを防ぐため、車庫を建て、児童、ＰＴＡや地区国鉄ＯＢの人達が年に２回洗ったり、油をぬったりして大切に保存してきました。昭和52年２月19日には高木産業の援助によって明るい窓をつけた広い車庫が完成し、機関車も大ぜいの人によってみがかれ、化粧なおしをして、りっぱになりました。これからもみんなの機関車として大切にしていきます。

Ｃ５７３０機関車の大きさ

○ 全長	２０ｍ２８cm
○ 全巾	２ｍ８０cm
○ えんとつまでの高さ	３ｍ９４cm
○ 総重量	７９．１６ｔ
○ 動輪の大きさ	１ｍ７５cm
○ 最高馬力	１，２８０馬力
○ 最高速度	８０km



●蒸気がピストンを動かすしくみ



1. ピストンがおされはじめるとき

ピストン弁が左側のポートを開くと，蒸気はピストンの左側へはいり，ピストンを右へおしはじめる。

ピストンの右側にあった蒸気は，右の開いているポートからにげ出してゆく。

2. ポートがいっぱいに開いたとき

ピストンが右の方へ動いて，この位置までくると，ポートは蒸気のはいる側，出る側ともにいっぱいに開く。このときが，いちばん力強くピストンが動かされているときである。

3. ポートがとじられるとき

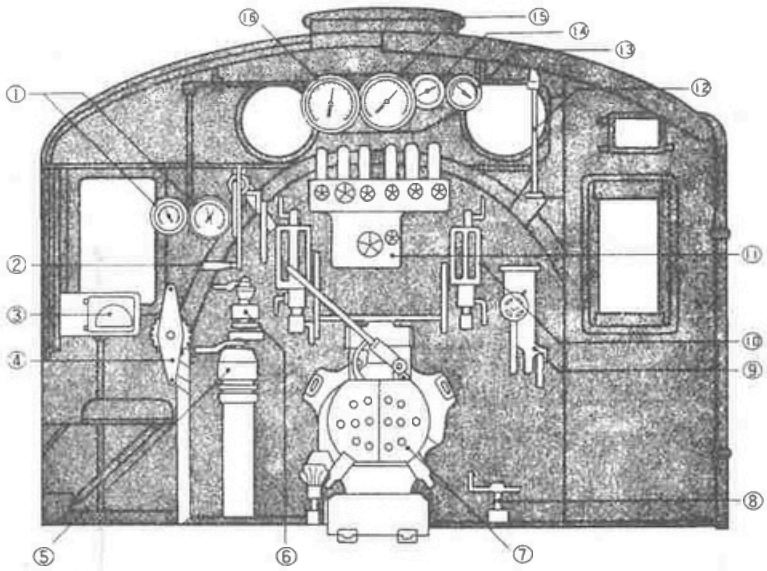
さらにピストンが右へ進むと，左側のピストン弁は左のポートをふさぎ，蒸気はこれ以上はいれない。

これから先は，今までにはいった蒸気がふくらもうとする力で，ピストンをおし進める。

4. ピストンが右側へおされきったとき

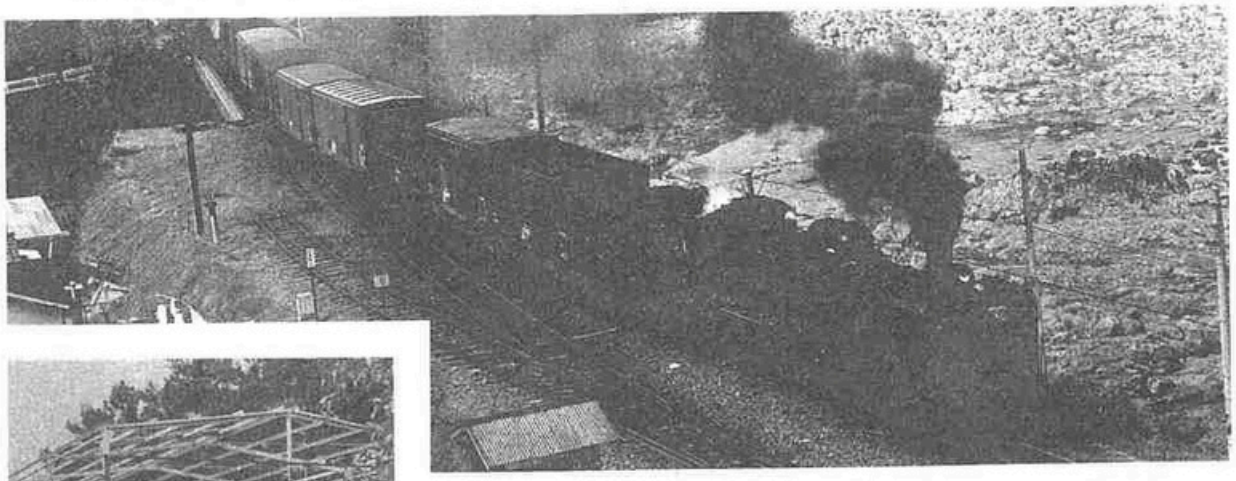
ピストンが右はしまでくると，こんどはもどる動作にはいる。このとき，右側のポートは少しだけ開かれていて，ピストンの右側へ蒸気が少しはいる。あとは，また1にもどり，同じことをくりかえす。

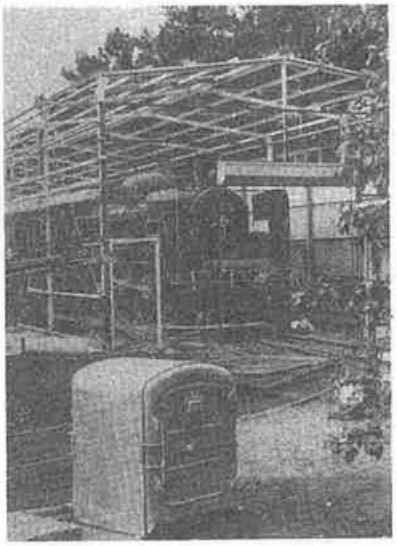
● 運転室のようす

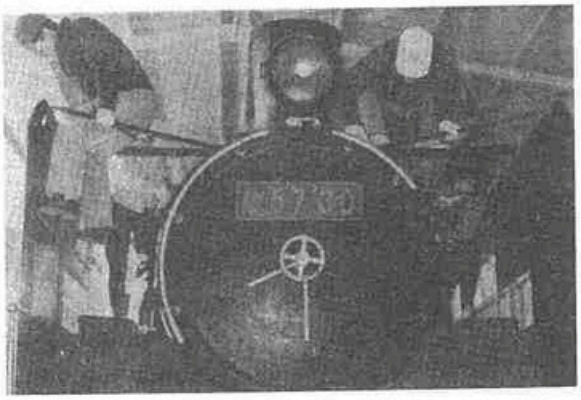


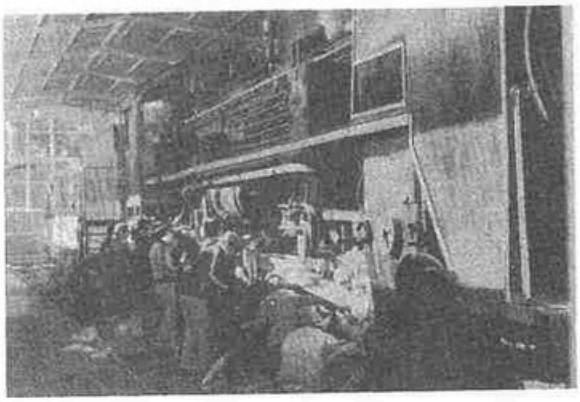
① 空気ブレーキ圧力計
② 加減弁ハンドル
③ 速度計
④ 逆転ハンドル
⑤ ブレーキ弁，自弁
⑥ ブレーキ弁，単弁
⑦ たき口戸
⑧ 灰ばこをあけるハンドル
⑨ 注水器
⑩ 水面計
⑪ 蒸気分配室
⑫ ふえハンドル
⑬ だんぼう圧力計
⑭ 給水ポンプ圧力計
⑮ ボイラー圧力計
⑯ 蒸気室圧力計

═大勢の人の手でみがかれて═══

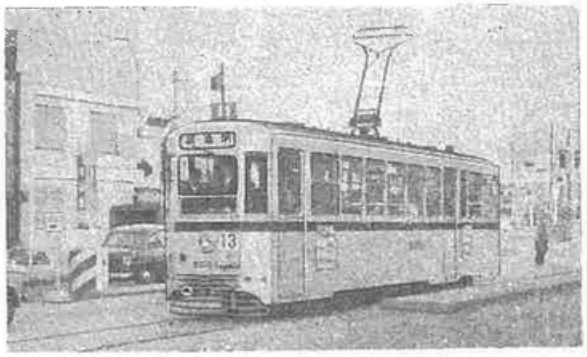








● 都電７０２４



チンチン電車の愛称で親しまれていた都電・市電の路面電車は、その役目を次第に自動車にゆずって数を減してきているが、ゴウゴウと道路を行くその姿に思い出のある人も多いでしょう。

都電７０００形は、昭和29年に近畿車輌で製作が開始され、従来の６０００形を大きく改善した新型電車です。以後同形の８０００形で生産は中止されている。７０００形は、窓を大きく広げ、通気をよくし、特に防音防振に配慮がなされ、前面が２枚窓、乗降口が中央と後部に設けられたのが特長です。本校の電車７０２４は、昭和43年３月13日まで、東京の上野～池袋間を走っていました。

定員	員	96名（内座席32名）	
最大寸法		長さ12ｍ50cm	巾　２ｍ20cm
		高さ３ｍ80cm	
重	量	15ｔ	
速	度	28.6km/ｈ	

ぼくらのほこり C5730号 わたしの思い出

きかんしゃさん

一ねん

きかんしゃさん、いつごろから はしっていたの。一日に なんじかんぐらい はしっていたの。ぼくに そっと おしえてよ。

きかんしゃさんは、すごく 大きいね。なぜ そんなに 大きいの。ぼくも きかんしゃさんみたいに 大きく なりたいよ。大きく なるには どういうふうに するの。おしえてよ。そうしたら ぼくも 大きくなって みせるよ。きかんしゃさん みたいに いっしょうけんめい しごとを するよ。きっと やるよ。それまで そのままで いてね。元吉原小学校に ずっと いて、ぼくを おうえんしてよ。

きかんしゃさん、なが生きしてね。

きかんしゃ元えもん

二年

ぼくたちは国語のべんきょうで、きかん車やえもんのことをべんきょうしました。やえもんはながいあいだはたらいたのです。元小にあるきかんしゃもきっとたくさんはたらいたとおもいます。

ぼくたちはきかんしゃに名前をつけるそうだんをしました。そしてともみちゃんの「元えもん。」がいいということにきまりました。ぼくたちは「元えもん。」とよぶことにしました。

しゃこを作ってもらって「元えもん。」はいいきもちだろうな、それにまどまで作ってもらっていつもぼくらがべんきょうしているようすが見られていいな、ぼくらはうれしいです。

おけしょうしたきかん車

三年

ほこりでいっぱいだった機かん車、運動場のすみっこでねむっていた機かん車とっても、きれいになったね。

車りんは、銀色。 からだはピカピカまるで、おけしょうしたみたい。

きれいにおけしょうして、ポッポーとなるのはいつかなあ。

きっと、わたしものせてくださいね。何だか、きどっているみたい。

元吉原小の機かん車。もう何年たっているのかなあ。こんなに、すてきなおけしょうだものだいじにしなくっちゃあね。

私たちのたから

四年

校庭のすみに、今静かに休んでいる機関車。私が生まれていない遠い遠いむかし、あのえんとつから黒いけむりをもくもく出して、日本中を走りまくった機関車。私は、機関車を見ていると、いろいろな事が、うかんでくる。森や林や田んぼの中を走るすがた。外国の飛行機のばくげきにもたえてきた機関車。まだまだたくさんあります。

今では、使われなくなった機関車。たくさんの思いでを、いっぱい積んでいる機関車。もう日本では、めったに見られない。私はときどきしんせきの子に、

「元吉原小学校には、とってもすばらしい機関車があるんだよ。」

と話すと、うらやましそうに聞いています。

この機関車を、いつまでも、元吉原小学校のたからものとして大切にしていきましょう。

話そうC五七

五年

ボッボー。雪の峠を一生けん命黒いけむりをはきながら登っていった蒸気機関車が、今、ぼくたちの目の前にある。この機関車は、今までに、雪の北海道、太陽の九州、山国の長野などを走り続けてきたことだろう。どこまでもまっすぐ続く二本の平行線の上を走り続けてきた機関車。時には、山の急こうばいをあえぎ、あえぎ、苦しそうに登り、時には、快適に緑の平野に汽てきをひびかしてつっ走り今までこの機関車は、何をみつめてきたのだろうか。田畑で働く人たち、鉄橋の下を流れる谷川、機関車の見てきたものを教えてほしいとぼくは思う。でも、冷たい鉄の体は、動くこともない。静かに休んでいるだけだ。しかし、このハンドルや汽てきには、機関士の汗と苦労がしみこんでいるように思える。今は、静かな機関車の歴史には、想像もつかないような、さまざまな働きがあったことを思う時、この黒い鉄のかたまりに、ぼくは、命を感じる。

県下でたった一台、ぼくらのほこりC五七よ、また落ち着いて静かになったら、ぼくは、鉄道のいろいろな話を彼としたいと思っている。

私達の機関車

六年

私達の学校には、素晴らしい宝物がある。それは蒸気機関車だ。今はもう、博物館などでしか見られなくなったが、私達は校庭の車庫へ行けば、いつでも見ることができる。

一、二年時代そばから見上げて、自分の背より大きい車輪やまっ黒にそびえる機関車があまりにも大きくて、びっくりした入学当時。レールの上にすわりこんで画用紙いっぱいに写生した絵、運転席にすわって運転士のまねをした幼い日。機関車は私の小学校生活の思い出の一部だ。ある時は友だちとながめ、今はそうじをする六年生なのだ。仲よしになった機関車だ。

今度、県内のどこの学校にもないたった一つの機関車のために、立派な車庫が作られた。さびのでやすい潮風を、防ぐシャッターもできたし、照明も明るく、汽笛もなるのだそうだ。残念ながら、私達六年生は今春限りで元小とも機関車とも別れなければならない。さびしいことだけれど、この蒸気機関車が母校と共に、いつまでもいつまでも栄えることをいのりながら、去って行きたいと思う。

いつの日にか、もっと大きくなった私を、この機関車に見せたい。

機関車庫落成に謝す

PTA会長　鈴木好夫

蒸気機関車には、夢がある。あの真黒な鉄の巨人は、腕まくりしたパワーを感じさせるだけでなく、煙をなびかせて走る姿も美しい。勢いよく吹き上げる蒸気の煙は、力強い男性的な匂いを感じさせ、コットンコットンと刻むひびきは安らぎを。遠くボーと呼ぶ汽笛は夢を更に広げる。こんな想いはわたしだけのものだろうか。新しい時代の子どもたちはそれを知らない。しかし、曲がりくねったパイプに囲まれた大きなからだは、たたきあげて作られた機関車は、人間の力の偉大さと歴史を肌で感じさせるだろう。その蒸気機関車が元吉原小にある。

昭和四十五年に、当時会長であった高木一三氏の御努力によって、蒸気機関車が風雨を防ぐ車庫に設置されましたが、近年痛みが多くなったので方策を考えていたところ、高木産業社長高木一三氏が、再度多額の費用をかけて、機関車・電車を整備し、展望窓のついた広い明るい車庫を作り御寄贈していただきました。

また、この整備に当り、小川清作、渡辺良一、森正隆氏等地区国鉄OBの方々の御指導と鈴木英利副会長、梶原重光部長をはじめ環境整備部・学年運営部・支部長等の骨身を惜しまない御協力に深く感謝をし、学区の宝物として、児童と共に永く大切に保存したいと思います。